

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「チュルク諸語における膠着性の諸相－音韻・形態統語・意味の統合的研究－」

(2018年度第2回・通算第5回研究会)

日時：平成30年12月15日(土) 14:00-18:00

場所：AA研セミナー室(301)

報告者：佐藤久美子(国立国語研究所)・児倉徳和(AA研)

(1) 菱山湧人(AA研共同研究員, 東京外国語大学大学院)

「タタール語の非動詞述語文における主語人称標示」

タタール語は多くのチュルク諸語と同様に、文の述部に接尾し、文の主語の人称と数に一致する人称標識を持っている。先行研究によると現代タタール語の名詞述語文などではその使用はまれで、主に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して述べる必要がある場合に用いられるという。本発表ではコーパス調査に基づき、感情形容詞、位格述語(「考え」+位格)、不定形+モーダル述語、モーダル小辞 *ikän* を述部に持つ平叙文で当該の人称標識の出現頻度が高めであることを示した。このことから本発表では、タタール語の非動詞述語文では、感情表出や強調、断言や判断などのモダリティを表す表現において当該の人称標識が用いられる傾向がある可能性を提示した。

本報告に続く質疑応答では、モダリティに関する議論のほか、以下のような質疑がなされた。

質問：代名詞があると人称標識が出ない、なければ出る、というようなことがあるのではないかと両方ある例はどれほどあるのか？

回答：タタール語の非動詞述語文では人称標識の出現頻度が全体的に低い。今回はその出現頻度が何に影響されているのかを調査することが目的であったため、人称標識の出ている例における代名詞の有無は考慮しなかった。今後はこれについても検討する必要がある。

質問：まとめて一つの表を作れば、紙幅を使わず代名詞と人称標識の両方でている例の数も含めて示すことができ、結果が一目瞭然となったのではないかと名詞述語文などでもタグを使って検索して全体的なデータが出せたのではないかと？

回答：コーパスに問題があり、タグを使っての検索で正確なデータを出すことは困難であった。

質問：出現頻度には文体も関わっているのではないかとコーパスの構成はどうなっているかと？

回答：コーパスの構成は、マスメディアの記事が約60%、文学作品が35%、人文系の学術論文が5%となっている。文体の影響があるかは調査しなかったが、インフォーマントによると、名詞述語文で人称標識が出ている場合は古風で文語的な感じがするという。

(2) 吉村大樹 (AA 研共同研究員, Ankara University)

「疑問接語の位置と疑問の焦点、およびスコープについて：トルコ語を中心に」

トルコ語の諸否疑問文では、疑問のマーカ―とされる接語が文中に生起して、話し手が質問したい部分を限定するという現象がみられる。本発表ではこの現象に関連して、実際の疑問の焦点となっている部分と疑問のマーカ―の位置が必ずしも一致しない場合があるという現象を取り上げ、これらの焦点位置の説明にむけて疑問接語が前後に生起する語とともにある種の共同指示的な機能を有していると仮定することによって説明ができること、この説明が典型的でない疑問文の意味の説明にも応用できるということを、意味構造、また発話行為に関する話し手の知識構造を記述する手法を用いて提示した。また疑問接語によって表される作用域の広さは、疑問接語と文中の述語との統語関係によって説明されるという分析を提示した。最後に、トルコ語のような疑問接語の文法的ふるまいについて、簡潔にいくつかのチュルク諸語にも言及した。

質疑応答では、本発表で仮定した疑問接語の共同指示的特性を本当に有しているかという分析の手法に対する疑義があった。また節境界の問題とスコープの関連性に関する発表者の誤解など、いくつかの問題があることが指摘された。また疑問文の「典型性」をどのように説明するかという課題も提示された。いずれも今後の大きな課題である。

(3) Aydın ÖZBEK (AA 研共同研究員, Çanakkale Onsekiz Mart University)

「非人称受動構文における時間的限定に関する一考察－日本語とトルコ語の対照分析－」

一般言語学の側面からも日本語学の側面からも動作が文法的な形式で表現できる様々な方法がある。但し、上記で見たとおりアスペクトの捉え方についてはアプローチの差異があきらかである。本来は、スラブ諸語にみられる完了 Perfective と不完了 Imperfective の対立に相当するようなカテゴリーの有無が議論の対象とされ、当然ながら動詞中心の研究が盛んになったが、動詞から派生した語彙的な要素の内的時間性も文法的なアスペクトカテゴリーとさらに異なる捉え方で扱われるようになった。アクツィオンスアルト（語彙的アスペクト・Kılmış）とよばれているこの現象と従来のアスペクトの主な相違点は、語彙的範疇は動作が表す行為の実現、流れを表す一方で文法的範疇である純粋なアスペクトは動詞が表す動作、現象、事件、状態、事態などが時間軸において経過しているかどうかによって定義されている。しかし、本来なら動詞ではない名詞述語（例 日本人だ、赤だ）の時間性についてアクツィオンスアルトでも説明不可能な点が残る。その問題点は本論文の中心である「時間的限定性」という概念で考察できると思われる。

本報告に続く質疑応答では、以下のような質疑・コメントがなされた。

1. 時間的限定性の概念について主にトルコ語の場合は動詞の分類の場合は質を表す名詞以外の「病気だ、卒業だ」などが欠けていないか？

確かに、本研究ではトルコ語の名詞述語がメインではないため見逃してしまったこれらの点についてよ

り注意深く考察すべきであると思われている。

2. 時間的限定性がないと主張されている受け身+超越時制のセットでその働きかけを特にどの部分がしていると思っているのか？

非人称受動の場合は受け身の接辞はなくてはならないのだが、時間的限定性の有無を左右している主な接辞は超越時制であると考えられている。

(4) 全員「成果公開に向けた打ち合わせ」

次回以降の研究会の日程調整を行うと共に、本研究課題の成果公開の一環として行う国内および国際シンポジウムの企画準備、本研究課題の終了後に公刊する成果論文集の編集方針について議論を行った。

参加者は20名（所員・共同研究員11名、コメンテータ3名、外部参加者6名）であった。それぞれがコメンテーターである塚本秀樹（愛媛大学）、藤代節（神戸市看護大学）、久保智之（九州大学）の三氏を中心に、専門とする言語・分野の見地からコメントを述べ、活発な議論が行われた。